

『古事記』における日向三代の聖婚説話

鄭 家 瑜

始めに

日向三代神話には大嘗祭、山と海との争い、隼人の服属、海宮遊行など、多くのモチーフが見える。それぞれに重要な意義を持っていると思われるが、これらのモチーフを貫くのは「聖婚」である。「聖婚」は日向三代神話の主題である。

ところで、日向三代の聖婚は異界婚である。異界婚の話型は『古事記』に多出している。日向三代の聖婚説話の独自性がどこにあるのであろうか。第一節では、日向三代の聖婚説話の独自性を考える。

日向三代の系譜の中で、波限建鵜葺草葺不合命は、祖父の邇邇芸命と父の火遠理命とは異なる性格を持っている。波限建鵜葺草葺不合命一代の異質は何を意味しているだろうか。一方、波限建鵜葺草葺不合命に關わる二代の海神の娘―豊玉毘売・玉依毘売の聖婚説話は、単に長いだけではなく、実は重要な働きを有する。第二節では、日向三代の系譜を検討しつつ、波限建鵜葺草葺不合

命一代の異質の理由を探り、豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話の意義を追究する。

日向三代の聖婚説話に一種の「天皇観」が見える。『古事記』の編纂と深く関わっていると見られる天武天皇と、それは密接不可分な関係を持っているだろうと考えられる。第三節では、天武天皇の意思を推察しつつ、日向三代の聖婚説話で示されている「天皇観」の形成の背景を考える。

一

日向三代神話とは、邇邇芸命、火遠理命と波限建鵜葺草葺不合命という祖父、父と孫との三代の物語によって、組み立てられたものである。三人の男主人公に対して、木花之佐久夜比売、豊玉毘売と玉依毘売との三人の女主人公がいた。この三代の聖婚説話を見てみよう。

まずは、邇邇芸命と木花之佐久夜比売の聖婚である。邇邇芸命

は天照大御神に遣わされて葦原中国に降り、笠紗の岬で大山津見神の娘の木花之佐久夜比売と出会った。邇邇芸命は即座に乙女に結婚を申し入れた。木花之佐久夜比売は一夜のうちに妊娠した。出産の時期に際して、邇邇芸命はそれを怪しんで、生まれる子が自分の子かどうかと疑った。比売は生まれる子が邇邇芸命の御子であることを明かすために、戸のない産殿にこもり、それに火をつけて三人の子を生んだ。三人の子は火照命、火須勢理命と火遠理命と命名された。

次は、火遠理命と豊玉毘売の聖婚である。兄の釣り針をなくした火遠理命は、塩椎神の教えにより綿津見神宮に行った。そこで歓待を受け、綿津見神の娘の豊玉毘売と結婚した。後に綿津見神からもらった宝珠を持ち帰り、それによって兄を征服した。一方、豊玉毘売は出産のために海辺にやってきた。だが、八尋和迹の正体が夫に知られたことにより、婚姻は破綻してしまった。豊玉毘売は生まれた子を残して海の世界に帰った。子の名前は波限建鷯葦草葺不合命である。

最後は、波限建鷯葦草葺不合命と玉依毘売の聖婚である。豊玉毘売に残された子の波限建鷯葦草葺不合命は、自分を育てた叔母、つまり豊玉毘売の妹である玉依毘売を娶った。五瀬命を始め、稲水命、御毛沼命、若御毛沼命との四人の子を設けた。若御毛沼命は後の神武天皇となった。

以上、日向三代の聖婚の男女主人公を見てみると、邇邇芸命、

火遠理命、波限建鷯葦草葺不合命との三代の天孫に対して、木花之佐久夜比売は山神、豊玉毘売は海神、玉依毘売も海神となり、いずれも国神であり、異界の女であるのが分かる。つまり、日向三代の聖婚は異界婚の連続である。

ところで、異界婚の例は『古事記』に少なくはない。大穴牟遲命と須世理毘売、本牟智和氣王と肥長比売、大物主神と勢夜陀多良比売また活玉依毘売、神武天皇と富登多多良伊須須岐比売命との聖婚は、すべて異界婚の例である。大穴牟遲命の例では、根之堅州国に行った大穴牟遲命は、色々な試練を無事に終え、最後に須世理毘売を背負って、生太刀、生弓矢、天沼琴を持って逃げ出したという。本牟智和氣王の例では、垂仁天皇の御子の本牟智和氣王は出雲大神の崇りを解くため、大神の宮に参拝に行つて、帰る途中で、肥河で出雲国造の祖先の歓待を受け、肥長比売と一夜契ったが、比売の正体が蛇だと知り、逃げ帰ったという。大物主神の例では、一つは大物主神が矢に化して、勢夜陀多良比売と契り、後の神武天皇の皇后を生んだという。一つは大物主神が夜中に活玉依毘売の所に通い、神君・鴨君の祖となる富多々泥古命を生んだという。神武天皇の例では、神武天皇が三輪山神の大物主神の娘の富登多多良伊須須岐比売命と契ったという。

このように、『古事記』に異界婚の話がよく見える。日向三代神話の聖婚説話は、必ずしも特殊ではない。しかし、ここで注目しなければならないのは、今述べた例がいずれも異界婚であるけ

れども、神武天皇の一例を除き、すべて皇御孫を設けない。これに対して、日向三代の聖婚説話には、火遠理命、波限建鵜草葺不合命、若御毛沼命と、三代続いて皇統を継承する。しかも、若御毛沼命は後に神武天皇となり、日本の初代天皇となった。というように、他の異界婚と異なり、日向三代の聖婚は、皇御孫の誕生、特に地上国の最大の「王」である神武天皇の誕生に関わっており、ユニークである。

また、異界婚で生まれた皇御孫は、異常誕生となり、生まれてから神聖性が保証される。三代の皇御孫では、火遠理命は、天孫の邇邇芸命を父とし、山神の娘でありながら国神である木花之佐久夜比売を母とするので、父から天と稲の靈力を、母から山と地の靈力を継承することになった。また同時に、火中誕生によって火神の側面を持っている。波限建鵜草葺不合命は、父の火遠理命の性格を継承したので、天、稲、山、地、火と靈力を備えている。若御毛沼命（後の神武天皇）は、父から天、稲、山、地、火の靈力を継承した他に、母の玉依毘売を通して、海との繋がりを深めた。

三代の系譜の最後に登場する神武天皇は、父祖たちが異界婚を重ねた結果、「天と地」「山と海」「火と水」「稲」などの靈力を持つことになった。これらの靈力によって、地上国の初代君主となった。日向三代の異界婚は、神武天皇の誕生に繋がるだけではなく、神武天皇が地上国の「王」とする資格を語るものでもある。そこ

に独自性が認められる。

二

日向三代の系譜において、邇邇芸命と火遠理命は共に末子であるが、波限建鵜草葺不合命は独子である。邇邇芸命と火遠理命には、女主人公との出会いの経過、及び結婚相手の出自及び御子の異常誕生の経過などについて詳しく書かれているが、波限建鵜草葺不合命には、結婚相手と四人の子との名前が記されるだけで、関連する物語が見えない。波限建鵜草葺不合命一代は父祖と異なる性質を持っているのがうかがわれる。波限建鵜草葺不合命一代の異質は如何に理解すればよいのであろうか。

『古事記』では、火遠理命は一名が「穂々手見命」とある。『日本書紀』では、神武天皇は諱が「彦火々出見」とある。一穂々手見命も「火々出見」も「ホホデミ」となり、両者は何かの関係を持っているだろうと考えられる。この問題について、津田左右吉氏は次の二点を指摘している。

第一は、木花之佐久夜比売の生んだ火照命・火須勢理命・火遠理命の三柱（『日本書紀』では四柱）のうち、最初の二柱には「またの名」はないのに、火遠理命だけは「またの名を日子穂穗手見命」としていることである。また、火照命・火須勢理命・火遠理命の名義はすべて「火」に関係しているが、火遠理命の亦名の「日子穂穗手見命」は、邇邇芸命と共に稲の穂からつけられ

たものらしく、「火」とは縁がない。「日子穗穗手見命」は邇邇芸命の子として相応しい。

第二は『日本書紀』神武天皇の条にはっきり「神日本磐余彦天皇、諱彦火々出見」と書いてある。また、四つの一書の中で三つ（第二、三、四の一書）は「磐余彦火々出見」としている。「日子穗穗手見命」は「磐余彦火々出見」と同一人物、つまり神武天皇と同一人物と考えられる。

氏は以上の二点を以って、海幸山幸神話に現れた「ホホデミ」が元は邇邇芸命の子であり、東遷物語の主人公の「ホホデミ」と同一人物であり、火遠理命とは無関係だったと説いている。そして、ホホデミの命の東遷物語は邇邇芸命の天降りの物語の次にすぐに来るはずだったという。この論は、井上光貞氏を始め、菅野雅雄氏、吉井巖氏、中西進氏などの多くの先学に支持されており、動かないだろうと思われる。

しかし、ホホデミの命の東遷物語は、なぜ邇邇芸命の天降りの物語の次にすぐに出て来なかったのだろうか。氏は続けて次のように述べている。ヤマト遷都の前と後とを区別するためにホホデミの命が二分され、一つは元の東遷物語の主人公となり、さらに新たに「神武天皇」という人物が生まれ、一つは海幸山幸神話の火遠理命と結合したという。そして、二人のホホデミの命の間に、波限建鷓草草葺不合命一代が置かれたという。

東遷物語が天降り物語の次にすぐ出て来なかった理由を、ヤマ

ト遷都にだけ着眼し、その間に登場している人物や物語の重要性を見ていないという氏の姿勢を、私は素直に納得することができない。天降り物語と東遷物語との間に登場している豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話が、実は大変重要な役割を果たしているのだが、その点が顧慮されていないからである。二代の聖婚説話の重要な役割とは、次の三点である。

- (一) 水と稲とを結合すること
- (二) 「天神之御子」の尊貴性を強調すること

(三) 若御毛沼命（後の神武天皇）の唯一の皇統継承者という資格を保証すること

以下、この三点を順番に見ていこう。

まず、(一)の水と稲とを結合することについて述べる。『古事記』には次のような神統がある。

——天照大御神——正勝吾勝勝速日天之忍織耳命——天邇岐志国邇岐志天津日

高日子彥能邇邇芸命——天津日高日子穗穗手見命——天津日高日子波限建鷓草

草葺不合命——神倭伊波礼毘古（穗穗手見）命

波限建鷓草草葺不合命一代を除き、天孫の代々は「穗」の名告りを有し、稲穂の神格を連綿として継承しているのが分かる。ここに、現世天皇を「稲神の子孫」（あるいは天皇自身が稲神である）とする意図が示されていることは、説明を俟たない。しかし、「稲神の子孫」としても、必ずしも地上国の「王」にはならない。古代には農事と不可分の「水の呪能」は、帝王の最も要求される

徳性だったからである。

物語では、天孫（稻神の子孫の意を指す）は二代続いて海神の娘と結婚している。この聖婚は海神の系譜を天神の系譜に取り入れることを意味しているに他ならない。天孫は海神の娘との聖婚によって「水の呪能」を取得し、「海」という他界を支配することになった。さらに、水界支配の呪能を取得したことによって、始めて地上国の「王」とする資格を持つことになった。この論理に従えば、海神の系譜はどうしても地上国の「王」の登場より先行しなければならぬ。豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話は、こういう系譜上の意義を有し、地上国の「王」の誕生にとっては不可欠な存在である。

ところが、天神、海神両系譜の結合ならば、豊玉毘売一代の聖婚で既に完成されたのではないかとすれば、玉依毘売の登場は何を意義しているだろうか。

「玉依毘売」という名前は特殊性を持っていない。大物主神の結婚相手は「活玉依毘売」とあり、巫女の一般的な名前だと見られる。物語の中で、玉依毘売の性格は全く書かれておらず、ただ豊玉毘売の妹として登場しているだけである。端的に言えば、玉依毘売という人物は、単なる豊玉毘売の分身と見ることができるところではないか。波限建鷓草草葺不合命一代が二人のホホデミの命の間に差し挟まれたことにより、波限建鷓草草葺不合命の妻が求められるようになった。その際に、波限建鷓草草葺不合命の母の

豊玉毘売の分身として玉依毘売という人物が作られたのではないか。

天降りの物語と東遷物語との間に豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話が登場しているにもかかわらず、実際に重要な働きや意義を持っているのは、豊玉毘売説話だけである。前に取り上げた、(二)の天神の御子の尊貴性を強調する点は、まさに豊玉毘売説話の重要な働きである。

この点をめぐり、記紀に出ている豊玉毘売説話を比較しながら、述べていきたいと思う。火遠理命と豊玉毘売の聖婚の場面をもう一度見てみよう。

火遠理命は塩椎神の教えによって綿津見神宮に着いた。豊玉毘売の侍女は火遠理命を見て「有人坐我井上香木之上。甚麗丈夫也。益我王而甚貴」と、火遠理命の出現を主の豊玉毘売に報告した。そして、侍女の話を聞いて、豊玉毘売は父に「吾門有麗人」と言った。『日本書紀』ではこの個所に侍女が登場しない。火遠理命の出現は豊玉毘売から「有一希客者、在門前樹下」と父母に伝えたことになっている。

ここで注意を払いたいのは『古事記』での「益我王而甚貴」という表現である。「有一希客者」しか書かれていない『日本書紀』に対して、『古事記』では火遠理命の尊貴性が強調されている。海神一族にとって、火遠理命は海神より尊い存在と設定されることとがうかがわれる。

火遠理命の出現に対して海神の反応はどうなるのか。『古事記』では「此人者天津日高之御子、虚空津日高矣。即於内率入而、美知皮之疊敷八重、亦絶疊八重敷其上、坐其上而、具百取机代物、為御饗、即令婚其女豊玉毘売。」とあるように、海神は火遠理命を「天津日高之御子」として、熱烈に招待する。そして、娘を結婚させた。これに対して、『日本書紀』には「海神於是鋪設八重席薦。以延内之」とあり、火遠理命を「希客」として招待するだけで、『古事記』のように特別な扱いをしていない。要するに、『古事記』は『日本書紀』より「天神の御子」とする火遠理命を重要視しているのである。

同じ傾向は豊玉毘売の出産の場面にも見える。『古事記』では、豊玉毘売は出産に際して「於是海神之女豊玉毘売命自参出白之、妾已妊身、今臨産時。此念、天神之御子不可生海原。故参出到也。」(傍線筆者)と述べている。夫に自らの上陸の理由を述べているのである。

古代の婚姻の形態について、武田祐吉氏は以下のように言っている。

男子が女子のもとを訪れて婚姻をすることは広く行われていた。女子の家の門に立ってその名を呼ぶより、よばいの語が婚姻の意味をなすようになった。この風俗のもとにあっては母系継承が行われることも勢いである。しかし、妊娠して出産期に近づけば女子は男子のもとにおもむく。そして、住宅

以外に産所を設けて分娩する。これは出産にとまなうものを穢れとして考えたによるものであり、同じく死亡の場合にも別に裏屋を作って葬儀を行うのと同じである。(傍線筆者)

つまり、古代の婚姻の形態は男が女のもとを訪れるものであり、出産期に近づけば、女子が男子のもとに赴くという。この論理に従えば、豊玉毘売は夫の所を訪ねたのであり、それは古代の習慣にしたがった出産のためだということになる。

ならば、なぜ『古事記』では「天神之御子不可生海原」との理由を付けなければならなかったのであろうか。

この段は『日本書紀』では「妾必以風濤急峻之日、出到海濱。請為我作産室相待矣」とあり、上陸する理由は語られていない。つまり、「天神之御子不可生海原」という理由付けには必ずしも必然性がないのである。ここから『古事記』では「天神之御子」という天神の血統及び天孫の尊貴性を強調する意図が見えてくる。ところで、こういう「天神之御子」の尊貴性は、最後は神武天皇に受け継がれる。豊玉毘売神話は、神武天皇に地上国の「王」の資格を備えさせる重要な意味を持っている。さらに、これは現世天皇の正統性を語ろうとする『古事記』の主旨にも密接しているのである。

次に、(三)の若御毛沼命(後の神武天皇)の唯一の皇統継承者という資格を保証することに移る。

日向三代の聖婚説話では、波限建鷓草草尊不合命一代はあまり

物語化されていないにもかかわらず、玉依毘売の出産の場面に關しては「生御子名、五瀬命、次稻水命、次御毛沼命、次若御毛沼命、亦名豊御毛沼命、亦名神倭伊波礼毘古命。故御毛沼命者跳浪穗、渡坐于常世国、稻水命者為妣国而入坐海原也。」とある。玉依毘売は四人の御子を生んだ。だが、稻水命が妣国に、また御毛沼命が常世国に行ってしまった。稻水命と御毛沼命とは、生まれてからすぐに系譜上から排除されたのである。他に、五瀬命も『神武記』に入ってから間もなく戦死した。

『古事記』に対して『日本書紀』では、若御毛沼命の四人兄弟は人代に入ってから一緒に戦っている。早く若御毛沼命の兄弟たちを排除した『古事記』では、若御毛沼命を唯一の皇統継承者にさせる意図のあったことがはっきり示されている。

というように、豊玉毘売神話が「水と稻の結合」と「天神之御子の尊貴性を強調する」との役割を、また玉依毘売神話が「若御毛沼命を唯一の皇統継承者にさせる」という役割を果たしているのである。ただし、玉依毘売は豊玉毘売の分身であり、波限建鷄葺草葺不合命一代が挿入されてから作られた人物であるので、玉依毘売の役割は豊玉毘売神話に移されても別に支障は生じない。物語で神武天皇が豊玉毘売を母とするのは別に不都合ではない。この意味で豊玉毘売が神武天皇の誕生に直接に繋がることは可能である。

以上に述べてきたことをまとめれば、波限建鷄葺草葺不合命一

代が挿入されたことによって、豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話が登場した。この二代の聖婚説話は神武天皇の誕生及び天皇とする資格を語るものとなり、海神・天神の系譜上の結合を意味している。のみならず、「天神之御子の尊貴性」を強調することを通して、現世天皇の正統性を語ろうとする『古事記』の主旨に密接する。要するに、この二代の海神の系譜は単なる系譜上の意義だけではなく、実は重要な働きをしているのである。

三

日向三代の聖婚説話には一種の「天皇観」が示されている。天孫という出自だけではまだ地上国の「王」にはならない。一天と地「山と海」「火と水」「稻」などの靈力が地上国の「王」として要求されている。これらの靈力によって、天、山、海の宇宙三界が把握でき、神武天皇に初めて地上国の「王」としての資格が保証される。

ところで、この「天皇観」は『古事記』全体の「天皇観」でもある。『古事記』の編纂と切っても切れない関係を持っている天武天皇の「天皇観」にも通じる。『天武紀』にある記事をいくつか見てみよう。

まず、広瀬の大忌祭と龍田風神祭りに關する記事を取り上げる。最初の記事は天武四年（675）四月癸未（十日）に、「遣小紫美濃王・小錦下佐伯連廣足、祠風神于龍田立野。遣小錦中間人連

大蓋・大山中曾禰連韓犬、祭大忌神於廣瀨河曲。」とある。その以後は次のようになる。

四年四月癸未(十日)	上の通り。
五年四月辛丑(四日)	祭龍田風神・廣瀨大忌神
同 七月壬午(十六日)	祭龍田風神・廣瀨大忌神
六年七月癸亥(三日)	祭龍田風神・廣瀨大忌神
八年四月己未(九日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月壬辰(十四日)	祭廣瀨・龍田神
九年四月甲寅(十日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月辛己(八日)	祭廣瀨・龍田神
十年四月庚子(二日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月丁丑(十日)	祭廣瀨・龍田神
十一年四月辛未(九日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月壬寅(十一日)	祭廣瀨・龍田神
十二年四月戊寅(二十一日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月乙巳(二十日)	祭廣瀨・龍田神
十三年四月甲子(十三日)	祭廣瀨大忌神・龍田風神
同 七月戊午(九日)	祭廣瀨・龍田神
十四年四月丁亥(十二日)	祭廣瀨・龍田神
同 七月乙丑(二十一日)	祭廣瀨・龍田神
朱鳥元年七月甲寅(十六日)	祭廣瀨・龍田神

というように、廣瀨大忌神祭と龍田風神祭は、天武朝で頻繁に行

われていたのが分かる。

廣瀨の神は穀物の神であるが、稲に甘き水を注ぐ水の神でもある。龍田の神は風の神であり、稲を悪しき風から守るやはり農耕神である。つまり、廣瀨祭と龍田祭は、農耕生産の無事平安を祈る祭である。この両祭が国史に現れる最初の記事は、『天武紀』四年の条であり、天武朝において始められ、その後恒例(毎年四月と七月)の祭祀となった。しかし一方、廣瀨祭と龍田祭との他に、天武朝には大嘗、新嘗、祈年、月次などの祭祀制度も整備された。整備された祭祀制度の中で、稲作の豊穰を祈る祭が多かったことは、注目される。

農耕社会では統治者にとって、農事と不可分に関わる水の生成力の取得、水旱の調整と豊穰の招祷、水による禊祓、風雨の来襲また季節の変化の予知等の呪術的実務の遂行は、重要な任務となり、必緊の祭政行為となった。天候支配の呪能、特に雨水をもたらず「水徳」は、古代の統治者にとって決して欠くことができない徳性であり、王として持たなければならぬ資格であった。

しかし、農耕を大きく左右する天候や水を掌握することは、容易なことではない。

『天武紀』五年五月の条に「下野国司奏、所部百姓、遇兇年、飢之欲賣子」とあり、同年六月の条に「大旱。遣使四方、以捧幣帛、祈諸神祇。亦請諸僧尼、祈于三寶。然不雨。由是五穀不登、百姓飢之。」とある。また、『天智紀』にあまり見えない「雨乞い」

に關する記事は、『天武紀』に九回も見える。水不足によって、「五穀不登」になった。さらに、人民は飢饉に苦しんだ。「飢饉」は天武朝の深刻な問題だったと想定できよう。

再び神話に目を転ずれば、神武天皇が登場する前に、豊玉毘売と玉依毘売との物語が先に出てきた。前に述べたように、それは海神の系譜を天神の系譜に取り入れたことを意味する。しかし一方、こういう神話の仕組みは、まさしく「不作」や「飢饉」に苦しみ、水徳を取得しようとする天武天皇の意思を反映しているのではないか。言い換えれば、天武天皇の水徳を重視する意思は、豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話を形成する背景にあったと考えられる。

天武天皇と日向三代の聖婚説話との関わりについて、さらに検討を続ける。

不作と飢饉の他に、天武朝には天変地異の記事も目立つ。大きな災害をもたらしたものに、七年十一月と十三年十月の地震があった。原文は以下のようなになる。

七年十二月の条

「筑紫國大地動之。地裂廣二丈、長三千餘丈。百姓舍屋、每村多仆壞。」

十三年十月の条

「壬辰、逮于人定、大地震。舉國男女叫唱、不知東西。則山崩河涌。諸國郡官舍、及百姓倉屋、寺塔神社、破壞之類、不可勝

數。由是人民及六畜、多死傷之。時伊豫湯泉、沒而不出。土左國田苑五十餘萬頃沒為海。古老曰、若是地動、未曾有也。」

二つの地震とも家を多く壊したが、十三年の地震は特に人民の死傷が多いのが分かる。地震の他に、天文の異変も相次いだ。最も烈しいのは十一年八月と十三年十一月であった。

天武十一年八月の条

「甲子、(中略)是夕昏時、大星自東度西。○丙寅、造法令殿内有大虹。○壬申、有物、形如灌頂幡而火色。浮空流北。每國皆見。或曰、入越海。是日、白氣起於東山。其大四圍。○癸酉、大地動。○戊寅、亦地震動。是日平旦、有虹、當于天中央以向日。」

天武十三年十一月の条

「戊辰昏時、七星俱流東北則隕之。○庚午日沒時、星隕東方。大如瓮。逮于戊、時天文悉亂、以星隕如雨。○是月、有星、孛于中央。與昴星雙而行之。及月盡失焉。」

他に、九年十一月は日蝕も月蝕も見えた。彗星も十年九月と十三年七月に見えた。天候も不順であった。八年は氷、九年と十四年は灰が降った。天武朝には不作・飢饉の他に、地震、天文の混乱、天候の異常なども相次いだことに注目すべきである。

天武天皇は一国の統治者であったが、大自然は掌握できなかった。天変地異に伴って、人民の政治に対する不満が高まったり、天皇の「正統性」が疑われたりすることがあったろう。兄の遺志

に逆らい、甥の大友皇子を始め、多くの人を殺し、つい天皇の位に即した天武天皇は、このような天変地異に臨む時、自らの「天皇とする資格」を強調しなければならなかっただろう。

『日本書紀』天武天皇の条の冒頭に「天淳中原瀛真人天皇、天命開別天皇同母弟也。幼曰大海人皇子。生而有岐嶷之姿。及壯雄拔神武。」とある。天淳中原瀛真人天皇は天武天皇であり、天命開別天皇は天智天皇である。ここで注目されるのは天武天皇の武勇を描写する所に「雄拔神武」とある。恐らく、天武天皇は自ら「神武」の天皇、即ち、地上国の最大の「王」となろうとする願望を持っていたのであろう。地上国の最大の「王」となろうとする天武天皇の願望は、神話での神武天皇に託されたと言ってよからう。

日向三代の聖婚説話では、神武天皇が繰り返した異界婚によって、「天と地」「山と海」「火と水」「稲」などの霊力を持つことになり、それらの霊力によって地上国の「王」になった。こういう神話の仕組みは、現実に天文や気候などの混乱に苦しみ、大自然の霊力を取得しようとし、地上国の最大の「王」となろうとする天武天皇の意思に繋がっていると考えられる。要するに、日向三代神話で示されている「天皇観」は、天武天皇の「天皇観」に通じ、その形成する背景が天武天皇の意思に求めるべきである。この意味で、日向三代神話は、『古事記』の中で最も天武天皇の意思に近いものと見られる。

津田左右吉、井上光貞両氏は、天孫降臨以後の部分は政治的支配者としての作為が見出されないと指摘する¹⁰。ところが、述べてきたように、天孫降臨以後の部分は、地上国の「王」とする「資格」を語っているものであり、初代の人皇である神武天皇の話に入る前に、先行しなければならぬものである。それゆえ、氏たちの考えは賛成しにくい。

終わりに

以上に述べてきたことをまとめれば、次の三点となる。

(一) 『古事記』に異界婚の説話が多く見られるが、日向三代の聖婚説話は他の異界婚と異なっており、神武天皇の誕生及び天皇とする資格を語る所に独自性がある。

(二) 豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話は天神と海神の系譜上の結合を意味する他に、現世天皇の正統性を強調する『古事記』の主旨にも通じる。

(三) 日向三代の聖婚説話に見える「天皇観」は、実際に天変地異に苦しみ、大自然の霊力を取得しようとすると同時に、神武天皇のような地上国の最大の「王」となろうとする天武天皇の意思に繋がる。とりわけ、水徳を重視する天武天皇の意思は、豊玉毘売・玉依毘売二代の聖婚説話を形成する背景にあったと見られる。

日向三代神話の主題は「聖婚」である。日向三代の聖婚説話を

通して、天武天皇の意思が多うかがわれる。というのは、日向三代の聖婚説話は、最も天武天皇の意思に密接しているものであり、『古事記』の成立に不可欠な存在である。

ところで、日向三代で二代続いて海神の娘が登場した。海神は阿曇氏の祭神とされており、この神話は阿曇氏と無縁ではない。海幸山幸神話では隼人族の祖が登場した。阿曇氏と隼人族は共に海人族である。両者はいかなる関係を有するだろうか。日向三代神話が『古事記』に組み入れられたことと、海人族はどのように関係しているだろうか。これらの問題は日向三代神話を考察する上で重要な意味を持つが、別稿に譲ることとしたい。

使用テキスト 『日本古典文学全集1—古事記、上代歌謡』(萩原

浅男、鴻巣隼雄校注、訳。1973、11、5。小学館)

学館)

『日本書紀』(井上光貞監訳。1987、3、15。

中央公論社)

注

1 大山津見神と綿津見神は国神の代表である。(西郷信綱『古事記の世界』。1967、9、20。岩波書店)

2 小学館の『日本古典文学全集1』の頭注によると、ホノニニギは稲穂が豊かに実る意となる。

3 津田左右吉『日本古典の研究(上)』(1972、6、10。岩

波書店)

4 井上光貞『日本の歴史』(1973、10、10。中央公論社)、菅野雅雄『古事記系譜の研究』(1970、11、30。桜楓社)

吉井巖『天皇の系譜と神話(一)』(1967、11、15。塙書房)、中西進『古事記を読む2—天降った神々』(1985、12、20。角川書店)

5 この点は既に津田左右吉氏に指摘された。氏はタマヨリヒメが海神の女たる地位に於いても、その名に於いても、トヨタマヒメの分身として見るに相応しいと説いている。(注3に同じ)

6 武田祐吉『上代の民俗と文化』(『国文学解釈と鑑賞』6巻9号。1941、9。)

7 類似の表現は邇邇芸命と木花之佐久夜比売との聖婚にも見える。木花之佐久夜比売は出産の時期に際して、一是天神之御子、私不可産故請」と邇邇芸命に言った。「天神之御子」であるゆえに、勝手に産してはいけないという意である。ただし、「天神之御子」を強調する役割から言うと、豊玉毘売の聖婚説話はやはり中心的に働いているのである。

8 青木紀元『日本神話の基礎的研究』(1983、5、15。風間書房)

9 尾崎暢殃「祈年祭以前(下)」(『学苑』第561巻、1985、11。)

10 津田左右吉(注3に同じ)、井上光貞(注4に同じ)